

青 空

渡辺 則夫 ……38 歳
村上 克彦 ……37 歳
外川 英治 ……38 歳
端本 麻衣子 ……27 歳

舞台、四角の柱が4つ並んでいる。それぞれが独立した部屋の様な雰囲気

客入れ

各領域がぼんやりと照らされている。

暗転

1

便宜上、それぞれの領域をルームと称する

各ルームに接続性はなく独立している

渡辺、村上、外川、端本、それぞれの環境の元に登場

照明、各ルームをうつすらと

各々のルームに板付き

渡辺きつかけで、各々傘を広げる

渡辺 何で人は、雨が降ってくると傘を広げるのだろう。
雨に濡れるのが嫌だから。
何で濡れることが嫌なのだろう。
気持ち悪いから。
何が気持ち悪いのだろう。
雨とともに降ってくる何かが、身体の中に入ってくるような気がするから。
自分の中の何かが、雨と一緒に流れ落ちるような気がするから。
何かって何だ。
降り注ぐ雨から身を守るため。
何で守らなければいけないんだ。
ずぶ濡れの犬は可哀相に見えるから。
可哀相と思われたくないから。
だったら、誰にも会わない帰り道は、傘なんてささずに帰れば良い。
誰にも会わないなら、自分を守る必要なんてないのだから。

1

でも俺は、傘をささずにはられない。そんな人間だ。

外川 僕さ、雨が降ってきた時に、まず空を見て確認するんだ。

村上 それっておかしいでしょ。

外川 そうかな。

村上 空を見ても、雨は確認しづらいでしょ。

外川 まあ、そうだね。

村上君はどうしてる。

村上 アスファルトにぼつぼつと浮かび上がる点々を見て、雨だっと思う。

外川 なるほど。

村上 普通そうじゃないかな。

外川 そうかも。

端本 雨が止んだ気がする。

雨が止んだ気がする。

私はどのタイミングで、この傘を閉じて、空を見上げるだろう。

この傘を閉じて、空を見上げた時、何が広がっているのだろう。

雨が止んだ気がする。

雨が止んだ気がする。

雨は本当に止んだのだろうか。

一旦さした傘を、閉じるタイミングを計りかねている。

降り続く雨の中に身を置く毎日に慣れて、正直、それも良いかなと思いはじめてる。

外川 思ったんだけどさ、雨って止むじゃない。

村上 止むね。

外川 どんな風に止むのかな。

村上 どういうこと。

外川 傘をさして、道を歩いてるとするじゃない。

そうすると、ああ、雨が止んだなって、傘を閉じるじゃない。

村上 雨が止んでも、傘をさし続けてたら、おかしいね。

外川 村上君は、雨が止んだ瞬間を見たことある。

村上 …ないね。

外川 何となく、気付かないうちに雨は止んで、僕らは傘を閉じる。

そうでしょ。

村上 そうだね。

外川 雨は、どんな風に止むのかな。

村上 …

外川 キュッと蛇口を閉めるように、急に降り止むのか。

ゆつくりと蛇口を閉めるように、徐々に降り止むのか。

村上 両方じゃないかな。

外川 わかんないけど。
なるほど。

傘を閉じる
照明、ゆっくりと暗転

2

音響、電話の呼び出し音
照明、ゆっくりと渡辺、外川ルームを照らす
音響、電話の呼び出し音、C.O.

渡辺 久しぶり。
外川 おお、久しぶり、どうしたの。
渡辺 うん、折り入って、相談があるんだけどさ
外川 何だろ。友人代表ならお断りだけど。
渡辺 大丈夫、お前が友人代表なんて、思ってもいないから。
外川 またまた。
渡辺 いや本当。友人とすら思っていないから。
外川 またまた。
渡辺 本当に。
外川 ：
渡辺 ：
外川 そういう冗談、止めないかな。
渡辺 本当に。
外川 ナベさ。
渡辺 お前がくだらないこと言うからだろ。
外川 久々で、折入った話つて言ったら、そういうこと思うだろ。
渡辺 ないないない。
全然そういう予定ないよ。
外川 もく、あつてよ。
もう、僕らもお近いんだから、どうするんだよ。
渡辺 どうするもこうするもないだろ。
何で、お近いと結婚してなきやいけないんだよ。
外川 法律で決まってるんだから。
渡辺 そんな法律ないよ。
外川 新しく決まりそうなんだよ。
消費税の増税のバスターとして。
渡辺 何だよ、法律のバスターつて。
外川 社会福祉の一環として、しっかりとした家族構成が、医療費や介護等々の負担緩和につな

がるから、二十歳にして選挙権をもって、成人とみなされるように、その後、40歳までに、結婚して、子供を設けなければいけない。

渡辺 なるほど。

少子化対策ではなく、あくまでも、高齢者を中心とした社会福祉政策としてなのか。

外川 そうだよ。

渡辺 守れなかった場合はどうなるんだよ。

外川 守れなかった場合は、政府の薦める人と、義務としての結婚と子作り。

渡辺 義務なのか。

外川 そう、39歳までの結婚は権利だけど、40歳からの結婚は国民の義務。

渡辺 俺に子供ができなかった場合は。

外川 行政による、不妊治療の全額補助、若しくは色々な事情で両親に恵まれなかった子供たちを養子として迎えるっていう選択肢がある。

渡辺 何か、意外にしつかりしてるな。

外川 だね。僕も話しててそう思った。

渡辺 後あれだな、プラス、減っていくであろう雇用の問題も抱き合わせで解決できる一体感があれば、お前政治家になれるんじゃないか。

外川 ね、僕も思いつくまま言っていて、意外に、これ良いんじゃないって思った。

渡辺 おお。

外川 そういう年だもんね。

渡辺 まあなく。

外川 町会議員とか市会議員に立候補しようとしてる奴とかっていない。

渡辺 とりあえず、そういう話は

外川 あ、もしかして、折入った話ってそういうことか。

渡辺 アホか。

何で俺がそんなことしなきゃいけないんだよ。

外川 結構合ってるんじゃない。

渡辺 無理無理。

気がしれないもの、そういう人たち。

外川 駄目だよ、政治に対して、もっと興味を持たないと。

渡辺 そうだな。

外川 誰がやつても変わらないじゃなくて、僕たちが変えるんだよ。

渡辺 良く聞くな。

外川 よし、ナベ立候補しよう。

で、僕がナベのブレイン的な感じのことをしよう。

渡辺 お前にブレイン頼んでどうするんだよ。

あ、でも、さつきみたいな奇抜な発想は面白いかもしれないけどな。

外川 ブレインって言うよりは、ブレインって感じたけどね。

渡辺 :

外川 何。

渡辺 おっさんだな。

外川 : そうだね。
今さ、渋い顔してたでしょ。

渡辺 してないよ。

外川 してたでしょ。思い浮かぶもん。そういう顔つてさ、どれだけ年取っても、変わらないんだよ。

渡辺 してないつて。

外川 後さ、いま、そろそろ本題入りたいつて、僕との会話、飽きてきてるでしょ。

渡辺 何で。

外川 端々に感じるんだよね。

渡辺 だったら、本題入らせてくれよ。

外川 何で、もつと無駄な話しようよ。

渡辺 やだよ。

外川 本当に嫌そうな顔してるんだろな。

渡辺 いちいち俺の顔想像するのやめてくれ。

外川 んで、折入った話つて何。

渡辺 ああ、うん、年明けさ、同窓会をやるうという話があるんだよ。

外川 同窓会。

渡辺 うん。

やつたことないじゃん。

外川 そうだね。

渡辺 ちょうど20年というこもあつて、そういう話が出るわけよ。

外川 え、何、ナベ、幹事なの。

渡辺 まあ、幹事つて訳じゃないけど、一応、そこに近いところで動くみたいな感じ。

外川 なるほどね。

幹事と感じが掛ってるね。

渡辺 :

外川 悪かったよ。

で、幹事は。

渡辺 小林。

外川 あく、小林君。

あれ、ナベと小林君つて仲良かったっけ。

渡辺 いや、特には、まあ、俺は地元いるからね。

外川 なるほどね。

渡辺 で、まあ、大分経ってるから、みんな何処にいるのかわかんないし、色々当たっていろいろということで、お前に連絡したんだよ。

外川 なるほどね。

渡辺 笑顔たる。

外川 何で。

渡辺 いや、何となくそんな感じがした。

外川 良いじゃない。笑顔の何が問題なの。

渡辺 誰も責めてないだろ。
外川 いやく、良いじゃない。楽しみじゃない。
何か、僕、既に興奮してきたよ。

外川、興奮してるアクション

渡辺 :
そう。
外川 冷めてるね。
渡辺 別にそんなことはないけども。
ま、とにかくそういうことだからさ、頼むよ。
外川 待つて待つて。
何、その早く話を切り上げたい感じ。
渡辺 切り上げたいもの。
外川 何で。
渡辺 もういいだろ。忙(しいんだよ)。
外川 嘘だよ。
渡辺 : 早いな。
外川 忙(しい)って言う人ほど、忙(しくない)もんだよ。
渡辺 わかった。じゃあ、言い直す、お前と話すの飽きたんだよ。
外川 そんなことない。
渡辺 何でだよ。
外川 僕楽しいもの。
渡辺 知らねえよ。
外川 わかった、わかった。
ぼちぼち終わるから。苛(た)まない。
渡辺 そういう見透(か)した感が、苛(た)つくんだよ。
外川 で、僕は何をすれば良いの。
渡辺 そっちにいるさ、同期に連絡して。
外川 詳細は。
渡辺 まだ。
外川 じゃあ、どうやって連絡するの。
渡辺 とりあえず、年明けに、同窓会あるって言うておいてよ。
で、連絡先聞いて、メールしといて。
外川 わかった。
渡辺 ということで。
外川 了解。

照明、外川残して他は消えていく

外川 過去を振り返ることは嫌いじゃない。過去が目の前に来て、今ここにある今が遠い未来にあることに思えるからかもしれない。
未来が必要ないって訊じゃない。
ただ、未来を考えることができないだけ。
いつからか、僕は未来を考えることができなくなった。いや、正確に言えば、そういう無駄な作業をしなくなっただけだろう。
過去を現在にもってこれる、ナベからの連絡は、嬉しかった。
その時、僕の周りにあつた、妻の声、子供の声が少し先の未来のことに思えたんだ。

照明、村上ルームを照らす

村上、その場で走っている

外川 いつから走ってるの。
村上 1年くらい前からかな
外川 何で走ろうと思ったの。
村上 いや、特に理由はないけど。
外川 すごいね。
村上 何が。
外川 ::
村上 ::
外川 毎日走ってるの。
村上 いや。
外川 ::週に何日走ってるの。
村上 週に3日くらいかな。
外川 すごいね。
村上 何が。
外川 ::
村上 ::
外川 何キロ位走ってるの。
村上 10キロ。
外川 10キロ。
村上 ::
外川 すごいね。
村上 ::何が。
外川 いや、10キロは凄いでしょ。
村上 何で。
外川 10キロだよ。
村上 ::
外川 ::
村上 ::

外川 何で走ろうと思ったの。
年も年だから、やっぱり、維持していくって感じかな。

村上 何となく、理由は特にはない。

外川 ::

村上 理由なんてないのに、やってること、たくさんあるでしょ。

外川 ::まあ。

::

疲れない。

村上 ::

外川 変な質問だったね。

村上 ::

外川 いや、単純に凄いなって思ってるんだ。
僕は、そういうの苦手ってというか、無理だなあ〜って。

村上 疲れるのはさ、普通に生きていても疲れるでしょ。

外川 ::まあ。

村上 ::

外川 ::

村上 それじゃあ、

外川 ちょっと待って。

村上 何。

外川 今度さ、会って、飲まない。
お酒は、ぬるめの燗が良い、肴は、あぶったイカが良い。
飲んで、飲んで、飲まれて、飲んで、的な感じでき。

村上 ::何で。

外川 え、いや、何でって。

村上 何で、会って飲むの。

外川 え、いや、せつかくこうやって、久々にさ、

村上 久々なことは確かだけど、それが何で飲むことに繋がるの。

外川 あ、村上君、お酒飲まないのか。飲まない人か。それだったらお酒誘われても、(そりな
るよね。)

村上 飲むよ。
酒、大好きだよ。

外川 ::

村上 ::

外川 普段は、どういう感じで飲んでるの。

村上 何で。

外川 気になるじゃん。何か、気になるじゃん。

村上 ::何で。

外川 いや、何でって言われれば、

村上 外川君。

外川 何。
村上 もういいかな。
外川 あ。そうだね。
村上 じゃあ、
外川 あ、同窓会は。
村上 考えとくよ。
外川 まあ、葉書とか行くと思うから。
村上 わかった。
じゃあ。

照明、村上残して他は消える
村上、走り終える。

村上 正直言うと、君のことは、忘れていたんだ。
どうやって俺の連絡先を調べたのかはわからないけど、迷惑に感じたんだ。
思い出とか、懐かしいとか、そういうのって、何で大事なんだろう。
嫌いとかそういうんじゃないで、興味がないんだ。
何で走るの。
犬とか馬とかは、何で走ると思う。
俺は犬でも馬でもないけど、やっぱり、何の意味もなく走ってるんだ。
走る場所がある奴は、その場所で走ればいいと思う。
数年前までは、俺もその場所で走っていたと思う。でも今は、実際に走るしか、走る場所
を見出せてないんだと思う。
ただ、それだけのことなんだと思う。
同窓会には行かないと思う。

照明、渡辺ルームを照らす

渡辺 よお。
村上 あ、久しぶり。
渡辺 本当に久しぶりだよ。
元気だったか。
村上 まあ、それなりに。
渡辺 たまには、お前から連絡しろよ。
村上 何で。
渡辺 俺、お前の連絡先知らねえもん。
村上 何で。前、教えたでしょ。
渡辺 失くした。
村上 それは、俺は知らないよ。
渡辺 走ってたって。

村上　まあね。
渡辺　すぎえな。
村上　それさ、外川君も言ってるけど、何がすごい。
渡辺　すごいだろ。
村上　別にすごかないよ。
渡辺　自分に無いものには、人は憧れを抱くものなんだよ。
村上　俺は、ナベに憧れなんてないよ。
渡辺　それは、お前の価値観の中で欲しいものが、俺の中に無いつてことじゃないか。
村上　なるほどね。
渡辺　納得すんなよ。寂しいだろ。
村上　で、何。
渡辺　ああ、外川から聞いた感じだと、来ないつもりだろうな。つて。
村上　ああ、同窓会。
渡辺　ああ。
村上　だね。
渡辺　何で。
村上　面倒くさい。
渡辺　言うと思つた。
村上　面倒くさいもの。
渡辺　走るの面倒くさくないのに。
村上　それは俺の問題だからね。
渡辺　来いよ。
村上　：
渡辺　来いつて。
村上　ナベはさ、行きたいの。
渡辺　まあ、そうだな。
是非でも行きたいつて訳じゃないけど、行きたいか、行きたくないかで言つたら、行きたいかな。
村上　へえ。
渡辺　外川なんて、話聞いた途端、テンション上がったぞ。
村上　そうだ、ナベと外川君って仲良いの。
渡辺　そうだな。
仲良いな。
結婚式で、友人代表の挨拶したしな。
村上　そうなんだ。
いつから。高校の時つて、付き合いあつたつて。
渡辺　お、珍しいな。何、俺のプライベートに興味あり。
村上　そうじゃないけど。
渡辺　何で僕の知らない間に、あんな奴と仲良くしてんのかな。
ナベの友達は僕だけでしょ。的な感じか。

村上 まさか。
渡辺 良いよ。素直に認める。妬け妬け。
村上 相変わらずうざいよね。
渡辺 そんなはつきり言うなよ。
あれだ、浪人の時に、仲良くなったんだよ。
村上 そうなんだ。
渡辺 面白いぞ。
村上 テンション高そうだね。
渡辺 そうでもないぞ。
村上 不思議だったんだけどさ、俺と外川君って大した付き合いがないわけじゃない。
渡辺 そうだな。
村上 ナベは外川君に、俺のこと、何か言ってた。
渡辺 全然。
村上 確かに、全然知らないわけじゃないし、3年間同じ学校に通ってたわけだけど、ほとんど話したことも何もないわけじゃない。
渡辺 そうだな。
村上 何で、あんな風に、話しかけられるんだらうつて。
渡辺 …20年の歳月じゃねえの。
村上 どういうこと。
渡辺 高校の時はほとんど話したことなくてもど、全然知らないわけじゃないし、20年の歳月が、何となく距離を縮めたんじゃないの。
村上 全然わかんない。
渡辺 相対性理論的な。
村上 もっとわかんない。
渡辺 良いことだら。
村上 さらにわかんない。
渡辺 昔は仲良くしたくても、環境とかの中で、ほとんど話すこともできなかったのが、20年経つて、こういう機会があつて、言えなかったことだったり、できなかったことが、何となくすんなりできちやうつてあるだら。
村上 リフティングが上手くなってる気がするつて感じ。
渡辺 お前の例えの方がわかんない。
村上 俺さ、リフティング下手じゃない。
渡辺 知らねえよ。
村上 下手なんだよ。
渡辺 そうなの。
村上 うん。
渡辺 まあ、最近、リフティングする機会なんてないんだけどね。
村上 それも知らないけどな。
渡辺 うん。
でもさ、テレビとかで、うまい人を観るじゃない。

渡辺 ああ。

村上 で、それを見て、一応、身体の動きとかが理解できるじゃない。

渡辺 うん。

村上 そうするとさ、自分でもできるような気がするんだよね。

渡辺 すごい自信だな。

村上 でも、できないじゃない。

渡辺 だろうな。

村上 そういうこと？。

渡辺 ∴どういうこと？。

村上 気のせいってこと？。

渡辺 それはお前次第だろ。

村上 え、どういうこと。

渡辺 確かに、20年の歳月が経ったからって、お前らの距離は何一つ変わったわけじゃないよ。でも、せつかく向こうがその気になって、歩み寄ってんだつたら、それは、お前がどういう選択肢を選ぶかで変わるわけじゃない。

村上 なるほど。

渡辺 外川が、勇気を出して、20年越しの告白をしたわけだよ。

村上 気持ち悪いな。

渡辺 それをお前がどう受け止めるかだよ。

村上 まあ、言いたいことはわかったよ。

渡辺 でも、そういう例えで言われると、絶対受け入れたくないよね。

村上 例えだから。

渡辺 まあね。

村上 でも、ちよつと納得できたよ。

渡辺 何よりだ。

村上 で、最近はどうなのよ。

渡辺 何が。

村上 色んなこと。

渡辺 まあ、普通かな。

村上 彼女は。

渡辺 いないね。

村上 仕事は。

渡辺 してるね。

村上 酒は。

渡辺 飲んでるね。

村上 うん、普通だな。

村上 ナベは。

渡辺 まあ、俺も普通かな。

村上 そう。

渡辺 聞けよ。

村上 何を。
渡辺 俺は、色々聞いたたる。彼女は？仕事は？酒は？
村上 それこそ、同窓会で聞けば良いんじゃない。
渡辺 なるほど。
お、出る気になった。
村上 そうだね。
特別テンション上がってるわけじゃないけど、20年の歳月がもたらす、色んなことを体験してみたい気はする。
渡辺 ひねくれてるな。
村上 そんなことないよ。
渡辺 まあ、何でも良いよ。
村上 つばいし。
村上 そう。
渡辺 まあ、そういうことで。
村上 そうだ。
渡辺 何だよ。
村上 ナベさ、外川君に言っておいて欲しいんだ。
渡辺 何。
村上 確かに違和感があったことは事実だけど、別に嫌いつてわけじゃないからって。
渡辺 ああ、はいはい。
村上 戸惑ってただけだつて。
渡辺 ああ、大丈夫、大丈夫。
外川気にしてないよ。多分、嬉しかったと思うぞ。
村上 何が。
渡辺 お前と話せたのが。
村上 ∴
渡辺 どうした。
村上 俺さ、そういうことを平気で言える、ナベに惚れつつ、すごい嫌いだね。
渡辺 うるせえよ。
村上 じゃあ。
渡辺 おっ。

照明、渡辺、村上アウト

照明、外川ルーム。ギターを抱えて、鼻唄交じりで弦を弾く、そして、すぐ消える

照明、渡辺ルーム

渡辺 何で彼女は、あんな風に人の死を客観的にとらえることができるのだろう。
最初に抱いた違和感でした。
そして、同時に、俺自身も、彼の死を聞いた時、客観的というか、無味無臭というか、他人事として感じたんです。

俺自身は、5年前に父を亡くし、その時は、口の中に粘っこい何かがあつたし、腐つたしめ鯖をガムの様に噛み続け、いや、腐つたしめ鯖をガムの様に噛み続けたことはないから、それはおかしな例えだが、とにかく、粘っこく、かつ、酸味を伴った嫌な感覚が常に口の中にあつたのだが、彼女には、そんな感じは感じられなかった。
もちろん年月がそうさせたのかもしれないが、俺が感じたのは、そういう違和感だつた。端本友貴、俺らの同級生が自殺したのは、8年前だそうさ。
この8年間、友貴は、そう呼んだことはないが、あえてそう呼ばせてもらつ。そう呼ぶことが大事な気がするんだ。
友貴は、もちろん知ってる奴もいるはずだが、俺らは知ることもなく、人生を終えていたんだ。

照明、麻衣子ルームを照らす

渡辺 私、友貴さんの高校の同級生で、渡辺則夫と申します。
麻衣子 はい。
渡辺 友貴さんは、ご在宅でしょうか。
麻衣子 兄は、…いませんよ。
渡辺 そうですか。じゃあ、友貴さんの連絡先を知りたいんですよ。
麻衣子 ……
渡辺 あ、いや、同窓会をやることになつたんですけど、それで、連絡を取りたいと思ひまして、怪しいものではないんです。
友貴さんに聞いてもらつてからでも構わないんですけど、A組の渡辺つて言つてもらえれば、多分わかると思ひんですけど、
麻衣子 兄は、…死にましたよ。
渡辺 え。
麻衣子 8年前に、兄は、死にましたよ。
渡辺 ……そうですか。
麻衣子 ええ。
渡辺 ……そうなんですか。
麻衣子 はい。
渡辺 すみません。全然知らなかつたもので。
麻衣子 いや、別に
渡辺 いつですか。
麻衣子 8年前です。
渡辺 そうなんですか。あ、言つてましたね。
麻衣子 はい。
渡辺 あ、何て言えばいいのかわからなかつた。
すみません、でした。
麻衣子 いえ。
渡辺 全然知りませんでした。

麻衣子 はい。

渡辺 すみません、なんか、本当に、どう言っているのか。
すみませんでした。失礼します。

照明、麻衣子残しで他は消える

麻衣子 突然でした。

いつも通り会社に行ったら、会社の玄関の鍵はかかかったままで、紙切れが貼ってあったんです。

見た目はいつも通り。でも、中には入れない。

出入りの業者の方が私に色々話しかけてきましたが、私自身に知る由もなく、私はただ茫然と立ち尽くしていました。

数日後、私は会社を訪れてみたんです。

すっかり倒産の慌ただしさはなくなり、毎朝通っていた会社は、単なるコンクリートの塊と化していました。

中に人がいないということは、こういうことか。

8年前、ひっそりと死んでいった兄を思い出しました。

見た目は兄なのに、もはや兄ではない。兄の容れ物がそこにあるだけ、そんな感じです。

兄が生きていたら、どうなっていたんだろう。

そう思っただんです。

照明、麻衣子狙いで変化する

麻衣子 同窓会、私が行っても良いものでしょうか。

隅の方でじっとしてただけで良いんです。

会費もお支払いします。

私一人くらい、隅に立っていても、誰も気付かないと思うし、皆さんも、多分ですけど、全員の名前と顔が一致しないんじゃないですか。

迷惑はおかけしません。

隅の方で、じっとしています。

::

見てみたいんです。

兄がもし生きていたら、どんな雰囲気だったのか。

::

見れば、少しはわかるような気がするんです。

照明、麻衣子アウト。

照明、渡辺、村上、外川狙い

村上 で、何て言ったの。

渡辺 何て言えば良いのかな。
外川 可愛いのかな。
渡辺 声は可愛かったな。
外川 じゃあ、良いんじゃない。
渡辺 お前な。
村上 そうだね。
渡辺 お前まで。
村上 まあ、俺は冗談だけど。
外川 僕はちよつと本気。
渡辺 待て待て待て待て。
お前らな、他人事だと思つて適當なことを言つてんじやねえよ。
村上 ナベは何て言つたの。
渡辺 何も言えなかつた。
村上 何かは言つたでしょ。
渡辺 まあ。
小林に聞いてみるつて。
まさかの展開だからな。
村上 ∴
外川 ∴
渡辺 まさかさ。
外川 端本君つて、卒業した後どうしてんだらう。
渡辺 わかんねえ。
外川 村上君は。
村上 俺も。
外川 僕も。
渡辺 誰と仲良かったんだつて。
外川 斉藤君とか。公平君とか。
渡辺 そつか。
ていうか、お前ら、そもそも端本が自殺したつて、知つてた。
外川 知らなかつた。
村上 俺も。
渡辺 驚きだよな。
外川 そうだね。
村上 ∴
渡辺 あれ、村上は。
村上 どうなんだろうね。
渡辺 何が。
村上 そんな驚くようなことなのかなつて。
渡辺 驚くようなことだろ。
外川 驚くようなことだと思つよ。

村上 　　：
渡辺 同期の奴が自殺だぞ。
外川 　　そうだよ。
村上 　　一つ聞いて良い。
渡辺 　　何だよ。
村上 　　本心で答えて。
渡辺 　　ああ。
外川 　　もちろん。
村上 　　悲しい。
渡辺 　　：
外川 　　：
村上 　　俺はさ、正直、悲しくない。
渡辺 　　：
外川 　　：
村上 　　多分だけど、結構な頻度で、それこそほぼ毎日、どこかで誰かが自殺していると思うんだ。
それこそ、俺たちだって一歩間違えたら、自殺していたかもしれない。
渡辺 　　：
外川 　　：
村上 　　それが、たまたま端本だつてことだよな。
外川 　　いや、でも
渡辺 　　まあ、そうだよな。
外川 　　ナベ。
渡辺 　　ドライかもしれないけど、言われればその通りだと思う。
実際、俺は、何の実感も持てなかつたんだ。
ああ、そうなんですか。
知らなくて、不躰な電話しちゃつてごめんなさい。的な思ひはあつたけど、今になつても、
悲しいとか、そういう感情つて、ほぼ無いもの。
外川 　　いや、でも、驚きは驚きじゃない。
渡辺 　　まあ、そうだけだ。
村上 　　そうだね。
外川 　　そもそもさ、何で自殺したの。
渡辺 　　何でだろ。
外川 　　聞いてないの。
渡辺 　　聞いてない。
そんな頭、働かなかつた。
お前聞ける。
外川 　　そうだね。
村上 　　ねえ。
外川 　　何。
渡辺 　　何。

渡辺 何かあれだな。村上が何か聞こうとすると、俺の中に、微妙に恐怖心が生まれるんだよな。

外川 僕も。

村上 何で。

渡辺 いや。

外川 あれだよな。村上君と話していると、自分という人間の偽善性っていうか、自分が抱える闇をあぶりだされる感じするよな。

渡辺 わかるわかる。

村上 意味わかんないよ。

渡辺 で、何。

村上 ナベと外川君は、自殺とか考えたことある。

渡辺 またタイプなところきたな。

外川 ナベはないでしょ。

渡辺 何でだよ。

外川 あるの。

渡辺 ないけど。

お前だつてないだろ。

外川 僕は家庭があるし。

渡辺 そんなこと関係ないだろ。

外川 僕が死んだら、家族はどうなるのか。

渡辺 逆に幸せになるかもしれないだろが。

外川 それは失礼すぎるでしょ。

渡辺 どうなんだよ。

外川 え。

渡辺 実際のところどうなんだよ。お前がいない方が幸せなんじゃないのか。

外川 そつち。

…どうなんだろうね。

渡辺 え。

外川 結婚生活も長いと色々あるからな。

渡辺 おいおいおいおい。

外川 村上君は。

村上 ないよ。

渡辺 ないのかよ。

村上 ありそうに見える。

渡辺 見えないけど。

村上 考えたこともないな。

渡辺 だよな。

村上 どんな状況だと、そういうこと思っただろうね。

渡辺 ……

外川 ……

村上 分かんないけどさ、幸せとか、幸せじゃないとか、そういうことじゃないんだろね。

渡辺 そうだな。
外川 そうかもね。
渡辺 ∷
外川 ∷
村上 ∷
渡辺 俺さ、ちよつと話してみようかな。
外川 何を。
渡辺 妹さんとさ。
外川 何で。
渡辺 何となく、村上と話してて思ったんだ。
多分さ、わかんないんだよな。
外川 何が。
渡辺 同期が30歳で死んだわけだろ。
今の俺らとも、違うわけだ。
わかんないから、何も思えないんだよな。
外川 別に何かを思う必要もないでしょ。
渡辺 そうなんだけど、妹さんが、俺らの同窓会に来たいって言っただけのこと、そういうことなん
じやないかなって。
村上 そうだね。
外川 いやいやいや。
村上 良いかもね。
渡辺 だろ。
外川 ちよつと待つて。ちよつと待つて。
渡辺 なんだよ。
外川 それはまずいんじゃないの。
渡辺 何で。
外川 何か、傷をえぐるみたいでさ。
渡辺 ∷
外川 やめた方が良くいと思っよ。
ね、村上君。
村上 俺は良くいと思っけど。
外川 そうだった。村上君はそうだった。
村上 でもさ、どっちにしる連絡はするわけでしょ。
外川 何で。
村上 同窓会に来て、良いかどうか。
渡辺 そうだな。
村上 きつとそういう話になるんじゃない。
外川 なんないでしょ。
村上 ナベだよ。
外川 そっか。

渡辺 そうだな。
村上 俺は良いと思う。つていうより、もつと色々知りたい。
外川 僕は微妙だな。
渡辺 思ったんだけど。
外川 何。
渡辺 結局さ、同窓会には、来ても良いと思う。
外川 駄目でしょ。
村上 どっちでも良いんじゃない。
渡辺 ∴
小林と話してみるわ。
外川 そうだね。
村上 どっちでも。
渡辺 ということ。
外川 じゃあね。
村上 じゃあ。

照明、渡辺と麻衣子

渡辺 聞いて良いですか。
麻衣子 大丈夫ですよ。
渡辺 何でなんですかね。
麻衣子 よくわかりません。
渡辺 ∴
麻衣子 渡辺さんは、30歳の時、何をしましたか。
渡辺 俺は、元々会社を継ぐ予定だったんで、大学を卒業してから、ずっと家の仕事をしてました。30歳は、社長になった年です。
麻衣子 良いですね。
渡辺 よくそんな風に言われるし、思われてるみたいです。
麻衣子 しょうがないですよ。
渡辺 まあ、そうですね。
麻衣子 つらい事ってありましたか。
渡辺 ありましたよ。
でも、俺の辛さが、他の人にとって、果たして辛いことなのかどうかは、わかりません。
麻衣子 そうですよ。
渡辺 ∴
麻衣子 私、30歳になったんです。
渡辺 そんな感じしないですね。
麻衣子 そうですか。
渡辺 もつと若いんだと思ってました。
麻衣子 兄が死んだ年になりました。

渡辺 ：

麻衣子 でも、わからないんです。

渡辺 ：

すみません。俺、全然わからないんですけど、卒業してからって、友貴さんは、何してたんですか。

麻衣子 兄は、東京の大学に行つて、普通に就職したんですけど、3年後に、軽い鬱になつて、仕事を辞めて、こつちに帰つてきたんです。

半年くらい、家でじつとして、その後は、普通に働いてました。

渡辺 普通にですか。

麻衣子 はい。

渡辺 こつちでの仕事が、また辛かつたとかじゃなくて。

麻衣子 はい。

おそらくですが。

私から見て、笑顔も増えましたし、普通に、楽しく働いてたんだと思います。

渡辺 ：

麻衣子 突然でした。

渡辺 ：

麻衣子 帰つてこないなと思つて、帰つてこなくて、そのまま帰つてこなかつたんです。

渡辺 ：

麻衣子 わからないんです。

どう思つていいのかわからない。

渡辺 何も残つてなかつたんですか。

麻衣子 遺書つてことですか。

渡辺 ；はい。

麻衣子 ありませんでした。

渡辺 ：

麻衣子 渡辺さんは、周りで誰か亡くなつたりとか、ありますか。

渡辺 父が、5年前に。

麻衣子 そうなんですか。

渡辺 癌で。わかつた時点で、もう相当ひどくて、あつという間でした。

麻衣子 悲しかつたんですか。

渡辺 悲しかつたですね。ちやうどその3年前に社長になつて、そういうことを見越してたかの様でしたし、悲しかつたです。

麻衣子 そうですよ。

今までそこにいた人がいなくなる。そこにあつたものがなくなる。

違和感つて感じますよね。

渡辺 はい。

麻衣子 その違和感は、いつから無くなりましたか。

渡辺 父のことですか。

麻衣子 はい。

渡辺 どうなんだろう。
気付いたら、無くなってたような気がします。

麻衣子 なるほど。

渡辺 聞いていいですか。

麻衣子 はい。

渡辺 悲しめないんですか。

麻衣子 ∴はい。

ちゃんと、悲しまないといけないと思うんです。

でも、わからないんですよ。

兄のことを忘れてる時も、いつぱいあります。

でも、ふとした時に兄のことを思い出して、思うんです。

ちゃんと悲しんでない気がする。

それってどうなんだろう。

もつと、しっかり兄のことを思い出して、思つて、悲しまなきゃいけないような気がする。

そう思うんです。

私は、兄が死んだ年になりました。

でも、兄の気持ちは全然わかりません。

そして、たまたま渡辺さんから、兄の同窓会の話を知りました。

生きていたら、兄はどうだつたんだろう。

見てみたいなって。

渡辺 おつさんとおばちゃんですよ。

麻衣子 兄は、元々おつさんっぽいですよ。

渡辺 そうですね。

麻衣子 何となくですけど、ありがとございます。

渡辺 ∴

麻衣子 なかなか、こういうことって、話す機会がなかったんで、
話せて良かったです。

渡辺 グリカシーに欠けるんですよ。

麻衣子 そうみたいです。

渡辺 今度、線香上げに行つて良いですか。

麻衣子 はい。

照明、渡辺、麻衣子アウト。

照明、外川ルーム。

外川、ギターを抱えて、鼻唄交じりで弦を弾く、そしてすぐ消える

照明、渡辺、村上

渡辺 どう思う。

村上 最近、連絡が多いよね。

渡辺 そういうことじゃねえよ。
村上 まあ、どう思っても何も、結果論だよな。
渡辺 後悔してんだよ。
村上 だから、結果論だから。
渡辺 わかつてるよ。
村上 昔から、ナベはそういうタイプじゃない。
渡辺 変わんねえもんだな、人って。
村上 そうだね。
渡辺 で、どう思う。
村上 何が。
渡辺 端本のこと。
村上 特に。
渡辺 俺にはさ、わかんないんだよね。
村上 何が。
渡辺 色んなこと。
村上 しょうがないんじゃない。
渡辺 麻衣子ちゃんのことも分からない。
村上 麻衣子ちゃんって。
渡辺 あ、妹。
村上 え、何、何かしたの。
渡辺 何もしてねえよ。
村上 またあ。
渡辺 何もしてねえよ。そんな状況じゃないだろ。
村上 いや、ナベはさ、意外な時に、予想外のことするからさ。
渡辺 そんなことねえよ。
村上 そんなことあるよ。
渡辺 違うよ。
渡辺 違う、違う。
村上 何が。
渡辺 そういうことじゃないんだよ。
村上 何が。
渡辺 良い。大して考えずに動いちゃうところは認める。
まあ、今回もそうかもしれない。
でも、手は出してない。
村上 どうでも良いけどね。
渡辺 じゃあ、聞くなよ。
村上 聞いてないよ。
渡辺 だから違うんだって。
村上 何が。
渡辺 色々後悔してるから、慰めてほしかったんだよ。

村上 だったら俺じゃない人にした方がよ。

渡辺 本当にな。本当そだよ。

村上 外川君とか。

渡辺 それは嫌だ。

村上 何で。

渡辺 わかるだろ。

村上 わかるけど。

::

良いじゃん、感謝してたんでしょ。

渡辺 そんなの本心がどうかわかんないだろ。

村上 そんなの、全てのことがそでしょ。

渡辺 そうだけど。

村上 素直に受け止めれば良いじゃん。

渡辺 ::

やっぱりさ、わかんないよな。

村上 何が。

渡辺 端本。

村上 ::

渡辺 わかんないんだよ。

村上 まあ、分かっちゃったら、きつとナゲもそらいうことになるんじゃない。

渡辺 そらかもな。

村上 多分さ、妹さんもそうだけど、分かっちゃいけないんじゃないかな。

渡辺 ::

照明、外川ルームを追加

外川、ギターを持っている

外川 こんにちは。

渡辺 ::

村上 ::

外川 何、何、何か反応してよ。

渡辺 じゃあ。

村上 そうだね。

外川 待つて、待つて。

そういう反応じゃない。

渡辺 何だよ。

外川 何でそんな風に、僕のことを扱うの。

渡辺 面白いから。

外川 僕は面白くないよ。

村上 俺は本当にこの場から、いなくなろうと思ってるんだけど。

外川 何で。
村上 いや、普通に。
外川 付き合っつてよ。
渡辺 何だよ。
外川 ギター買ったんだよ。
渡辺 そう。
外川 村上君、僕、ギター買ったんだよ。
村上 そうなの。
外川 何、何、その冷めた反応。
渡辺 買えば良いだろ。
俺知らねえよ。
村上 俺もそうだね。
外川 違うよ。
何で買ったかだよ。
村上 欲しかったから。
渡辺 騙された。
外川 違うよ。
もつとき、親身になって、僕のことを考えよう。
僕の気持ちっていうかさ、僕になりきって考えよう。
渡辺 ∴
村上 ∴
外川 え 何。
渡辺 お前つてさ、良い感じで空気読めないよな。
外川 え 何。
村上 外川君つて、ナベとは違うタイプで天然だよな。悪い意味で。
外川 え 何、何。
渡辺 何でもないよ。
外川 気になる。何、何。
渡辺 わかったよ。
何でギター買ったんだよ。
外川 ちょっと、何、気になるじゃん。
説明して。
説明してくれたら、僕がギターを買った理由を説明するよ。
村上 駆け引きにも何にもなってないから。
外川 そうだよな。
僕もそう思った。
だったら、聞かないつて二人は言うよな。
渡辺 そうだな。
村上 わかってんじゃん。
外川 聞いてください。

僕がギターを買った理由。
：
渡辺 ：
村上 ：
渡辺 言えよ。
外川 聞いてよ。
外川、何で突然ギター買ったんだよ。つて。
渡辺 それ必要か。
外川 必要。
聞いて。
村上 外川君、何で突然ギター買ったの。
渡辺 村上。
村上 面倒くさいから。
渡辺 なるほどな。
何でギター買ったんだよ。
外川 ：
渡辺 何だよ。
外川 まあ、いや。
渡辺 何を拗ねてんだよ。
外川 ；拗ねてないよ。
渡辺 拗ねてるだろ。
外川 拗ねてないよ。
渡辺 拗ねてるつて。
外川 拗ねてないつて。
村上 じゃあ、俺そろそろ。
外川 待つて待つて、拗ねてました。
すみません。立場もわきまえずに、拗ねてました。
聞いてください。
お願いします。
渡辺 ；
村上 ；
渡辺 言えよ。
外川 はい。
ありがとございませう。
：
色々考えたんだ。
端本君のこと。
まあ、結局は、；分からないなつて。
で、何か、色々考えて、
何となく欲しいなつて。

ギター欲しかったんだよな。つて。
：
渡辺 ：
村上 ：
渡辺 それだけ。
村上 それ最低だよ。
渡辺 結局欲しかっただけじゃん。
外川 いやいやいや、そういう単純なことじゃないんだよ。
渡辺 単純な説明だったじゃねえかよ。
欲しいな。欲しかったんだよな。
で、買った。
本当な、村上じゃないけど、最低な時間だったよ。
外川 違う違う、違う違う。
ごめん、僕の言葉が足りなかった。
：
えつとね。
うん、
：
昔から、ギター弾ける人に憧れてたんだよね。
ずっと弾きたかったんだよね。
でもさ、何となくきつかけ失って、まあ、そのまま、俺の中から消えて行った
わけだよな。
だからさ、端本君のことが分からないってことと、全然意味合いは違うと思うよ。でも、
何となく、昔やりたかったことを、ふと思ったんだよ。
今更、ギター弾けるようになったからつて、何がどうなるわけじゃないんだけど、実際、
弾けるようになるかどうか分からないし。
でも、やってみた方が良かったなつて。
：
それで、買ったんだよ。
渡辺 ：
村上 ：
外川 どちらかな。伝わったかな。
渡辺 ：
村上 ：
渡辺 うるせえよ。
外川 何、何も言っていないでしょ。
渡辺 うるさい。うるさい。うるさい。
どうせお前には無理だよ。3日で挫折するよ。
外川 そうかもしれないけど。
何をそんなに怒っているの。

渡辺 :
頑張れよ。
秃げ散らかしても、格好良いやつは格好良いんだから。
外川 何それ。
渡辺 何でもねえよ。

照明、渡辺アウト

外川 何なの。
村上 まあ、色々思ひことがあるんじゃないの。
外川 わかんないな。
村上 まあ、頑張ってよ。
外川 :ありがとう。
村上 今度聴かせてよ。
外川 え。
村上 歌はさ、気持ちだから。
期待してる。
外川 いや、でも
村上 じゃあね。

照明、村上アウト

外川 いや、でも、歌は、気持ちって、僕は、歌よりギターなんだよね。

外川、ギターを弾く。まるで弾けないが、適当にジャカジャカしながら、適当なメロデーで熱唱。

外川 僕は知ってる。
失ったものがあるのなら。僕は生きていこう。
明日が晴れるなら。今日が曇りでも良いじゃない。
僕は知ってる。
できなかつたことがあるのなら。僕は生きていこう。
明日が晴れるなら。今日が雨でも良いじゃない。
前を向いて、歩いて行こう。
笑って話せる、未来夢見よう。
輝く星空に、手を広げよう。
涙した昨日に、未来夢見よう。
思い通りにならないことばかり、
思い通りにならないことばかり、
だから、生きていこう。

生きていこう。生きていこう。生きていこう。

外川以外、拍手

外川

変な歌。

本当に挫折しそうだ。

照明、外川アウト

照明、麻衣子

麻衣子

変な歌でした。

でも、何か、面白くて、あつたかくて。

良いと思いました。

渡辺さんが聴かせたいって言ったの、何となく分かります。

毎回違っている、皆さんの突っ込みが、何故か、私の胸にくつときて、実は私、泣いてたんです。

::

兄が死のうと思った理由は、やっぱり、今でも分かりません。

今も、私の中の違和感は変わりません。

でも、思ってたんです。

理由が分かったからって、きつとこの違和感は無くならないんだろうなって。

きつと、それで良いんですね。

大事なものを失くして、それを消化しなければいけないってわけじゃないですもんね。

どんな理由であれ、兄はもういない。

みなさんを見たからって、その中に兄はいない。

::

そういうことですね。

::

雨は、また降ってくる。

その時、私は、条件反射で傘を広げるだろう。

そして、いつか、雨はやむ。

::

その繰り返しだ。

私は、傘を広げたまま歩かない。

雨が止めば、傘を閉じ、空を見上げるだろう。

雨が降れば、傘を広げ、雨から必死に身を守るだろう。

::

大丈夫、私にだって、それ位はできる。

照明、渡辺、村上、外川

渡辺 麻衣子ちゃん、同窓会、来れないつて。
村上 何で残念そうなの。
渡辺 別に残念じゃないよ。
外川 何でさ、僕の歌を聴かせなきていけなかったのかな。
村上 ロックだったよね。
外川 そう。
渡辺 麻衣子ちゃん、良かったつて。
外川 本当。
村上 麻衣子ちゃんの名前が出る度に、ちよつと残念そうに聞こえるのは、俺だけかな。
渡辺 何なんだよ、お前は。
何もないから。
外川 え、何、どういうこと。
村上 多分だけど、ナベの悪い癖が出たんだと思うんだよね。
外川 え、なに、どういうこと。
渡辺 そんなことねえよ。
外川 指の骨、バキバキ鳴らす奴。
渡辺 何だそれ。
村上 外川君。
外川 何。
村上 外川君つて、そんなに馬鹿だったつて。
外川 え。
渡辺 そんなもんだよ。
村上 そつか。
外川 え、何何、どういうこと。
渡辺 外川。
外川 何。
渡辺 あの歌さ、同窓会で歌わない。
外川 え。
村上 良いね。
渡辺 な。
外川 え、何で、何で。
無理無理無理。
渡辺 良いから、そういう時間作るから。
外川 ちよつと、ナベ。
渡辺 あ、練習するなよ。
外川 どういう意味。
村上 あの、ロックな感じが良いんだよ。
外川 え。
渡辺 晴れば良いな。

村上 まあ、どんな天気であれ、晴れにしましょう。
外川 どういうこと。
渡辺 そうだな。

照明、眩転
全員、傘をさす
照明、星空

村上 外川君。
外川 何。
村上 今度、二人で飲もうか。
外川 え、どうして。
村上 じゃあ、無しで。
外川 いやいやい、ごめんごめん。
飲もう、飲もう。
飲みたい、飲みたい。
いや、飲んでください。
村上 ∴
外川 本当に、ごめん、驚いて。
急に、どうしたのかなって思つて。
村上 うーん、何となくそれも良くなつて。
外川 良いね。
村上 やっぱ、止めようか。
外川 何で。
村上 色々さ、相談乗ってあげるよ。
外川 え、何で。
村上 悩み多そうだからさ。
外川 村上君は、悩みつて無いの。
村上 ∴どうだろうな。
外川 まあ、いや。どつちにしよ、村上君の悩みに、僕は答えなんて出せないだろうし
村上 ∴そうだね。
外川 僕、馬鹿らしいしね。
村上 アカペラであの歌聴かせてよ。
外川 え。
いや、だから、僕がやりたいのは、歌じゃなくて、ギターだから。
村上 じゃあ、一方的に連絡するから、無理矢理時間作つてね。
外川 え。
村上 じゃあ。
外川 え。
ちよつと、村上君、村上君、村上君。

間

渡辺

何で人は、雨が降ってくるとう傘を広げるのだろうか。

雨に濡れるのが嫌だから。

何で濡れることが嫌なのだろうか。

雨と共に降ってくる何かが、身体の中に入ってくるような気がするから。

自分の中の何かが、雨と一緒に流れ落ちる様な気がするから。

何かって何だ。

::

降り注ぐ雨から身を守る。

何で守らなければいけない。

ずっと濡れの犬は可哀想に見えるから、可哀想と思われたくないのかもしれない。

だったら、誰にも会わない帰り道は、傘なんてさきずには帰れば良い。

誰にも会わないなら、自分を守る必要なんてないのだから。

でも僕は、傘をさきずにはられない、そんな人間だ。

全員、雨がやんでいることに気づき、傘を閉じる

音楽

照明、暗転